

黒騎士

亜楽

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ゲーム「仁王2」の二次創作小説です。

短編1話完結。

目次

## 黒騎士

本能寺を包む炎は残り少ない。朝の道が薄明るく燃える。影より暗い漆黒が行く。

ヤスケは境内を出口に向かっていた。荷車を引いて歩く。昨晚からの炎と、そして戦で、壊れかけてはいるものの、背負っていた主君を乗せて充分に動く。

織田信長。第六天魔王。戦国の彗星。時代の改革者。異国から売られてきたヤスケに、一切の差別をせず実力を認めた。計り知れない魂が潰えた。荷台に横たわり、現世から眠る。

腕にかかる重みは、支えだった。失われた命を感じられた。

信長に言われた。謀反者に亡骸を渡してはならない。他の誰でもない、ヤスケに託した。信長は死のうとも、その言葉はヤスケの中で生きている。

行く先は決めていた。東にある高い山。信長は富士山が好きだった。地下室と隠し通路を知る、数少ない家臣は、大半が本能寺の炎に消えた。

距離がある。ヤスケなら苦ではないが、遺体の腐敗を心配した。振り返る。火傷と流血は痛ましいものの、変わらない魔王の覇気を感じさせる。

氷の蝶が舞う。信長に寄り添う。少年のころからヤスケには靈感があった。濃姫が信長を守っている。なればなおさら、二人を無事に送り届ける。果たさなければならぬ主命。

黒い甲冑で地を踏みしめながら、ヤスケは思う。

サムライになりたかった。

サムライとはなんなのか、ヤスケは知らない。家中の者にナイトと教えられた。理解しつつも腑に落ちなかった。そのわずかな違いが、信長がヤスケに与え、求めたものに感じられた。

崩れた門を通る。信長を守るために、本能寺からは早く離れたい。

信長を追う者がいる。

ただ立っているだけで、行く手を阻む意思が伝わってくる。背にし

た大太刀は寧猛な牙。異人のヤスケには劣るが、頑強な体格。斎藤利三とは以前にも顔を合わせた。

明智光秀の腹心として名高い。厚い信頼に応じる忠義が、サムライなのだろうか。周囲から向けられる視線の違いを羨んだ時もある。

思いながらも歩を進める。すでに荷車からは手を放していた。腰の剣を抜き振りかぶる。光秀は信長を裏切った。ならば利三もまた、許しがたい敵に間違いない。

高速で抜刀した利三と、振り下ろしたヤスケの刃が重なる。

ヤスケはあえて力を抜いていた。交錯した剣は空中に捨てた。目を引く目隠し。体をひねり、回転しながら斧に持ち替え、勢いをつけて横から薙ぎ払う。

「オンッ！」

利三の長い刀では防ぎにくい急な斬り込み。呪符を取り出していた。念じて波動が放たれる。剣の達人であるだけでなく、陰陽術にも通じる利三に、ヤスケの斧は弾かれた。

斧を握り直す。大太刀と同じ間合い。

「やめておけ。我らが戦う理由はない」

利三の言葉にヤスケが驚く。

英語だった。

「信長を引き渡せば、お前は助けてやる。死体が必要だ。落ち延びたなどと虚報を流されては困るのでな」

声がよどみなく流れる。文武両道の博学と聞いてはいたが、意外だった。これほど自然な英語はいつ以来だろうか。思わず気がゆるみそうになる。

「できない」

自分に言い聞かせながら答える。

歯を食いしばり、地を踏み、両腕に力をこめる。全身が燃えるかのようなヤスケに対して、利三は冷淡に告げる。

「信長は死んだのだぞ」

「誰にも渡すな。俺はそう言われたんだ」

「信長は、お前を」

息を吐く。

「お前達を、家臣とは思っていない。珍妙な動物。人ならざる曲芸。猿回し。信長の好みそうな遊びだ」

わずかな沈黙。

「だからこそ、私はお前を殺さない。光秀様は信長とは違う。お前は  
お前の好きにすればいい」

「俺、は」

雷鳴が響く。斧を一直線に構えるヤスケの背後に、現れる守護霊。  
アトラスベア。雷を宿す熊。

雷撃を思わせる突進。

「俺はサムライだッ！」

「愚かだ」

大太刀で斧を叩く。斧は地に落ち、刀は跳ね上がる。

「乱世に望め」

よく通る声に、二人の時間が止まる。

「乱世に興じるがよい」

「信長？」

困惑しながら、利三が叫んだ。

荷車に眠る信長は動かない。火が立ち上る。空中で生きているか  
のように動き回る。炎そのものが意思を持ち、獣の姿に変わる。

現れたのは炎の霊獣、豹尾神。

優雅とも言える足取りでアトラスベアに並ぶ。炎と雷が、混ざり

合って周囲に四散する。

「いささか無粋ではあるが、悪くない余興よ」

「信長様……」

「お主にも渡しておこう。褒美だ」

流れ込んでくる豹尾神。ヤスケの心に信長が重なる。乱世を駆け  
抜けた野心の、その先にある思い。死せども消えず、より多くの息吹  
が生まれていく。

呼応。咆哮。燃え上がり、鳴り響く。

豹尾神とアトラスベアが同時に飛びかかる。ヤスケは斧を下段か

ら構え、天高くまで振り上げた。

火炎と雷電、そして漆黒の斧が、利三に叩き込まれ、吹き飛ばす。空が明るくなった。

「第六天より、信長は見ておるぞ」

舞い上がる天眼孔雀。美しく広げた翼は、世界のすべてを、未来すら見通す眼。さらに大きく輝き、そして孔雀は消えた。

斧を地に突き立て、祈る。アトラスベアと豹尾神に。天眼孔雀に。織田信長に。他の作法を知らずとも、止まらない思いが全身に満ちる。

利三はまもなく意識を取り戻した。目を見開き、起き上がれないまま、声もなく口を開く。

「ああ、ぐ……つうあー」

負傷とは違う苦しみ方。

よろけながら立ち上がる。利三は赤い目をしていた。人ならざる者の色。妖怪の目。

「まだ……だ。あと一手先まで、この体、は」

「なにを言っている？」

日本語というだけではない。何者かに動かされているような挙動に、ヤスケは身構える。拾い直してある剣を利三に向けた。

「いつの世も、サムライが邪魔をする」

傀儡の足取りで利三が去る。

追いかけてようとしたヤスケだが、立ち止まり、荷車を振り返る。剣を納め、斧も背に戻した。

主命の途中だった。追手は退けた。過分な褒美まで渡された。応じなければならぬ。豹尾神に誓う。信長の遺体を富士山に運ぶ。

再び荷車を引く。

日本に来る前と同じ役目。奴隷ですらなかった。牛馬として使われた。サムライにしてやる。新しい買い手は、そう言うど鎧兜を与え、御前試合に立ち合わせた。

時はただ進む。信長がいなくとも、示された未来は見失わない。荷車を引く漆黒のサムライは、魔王の従者。

第六天魔王とともにある。より強い覚悟が、深まる器に共鳴する。荷台を飛ぶ氷の蝶がヤスケに宿る。濃姫の薄氷蝶。現世に常世に信長と付き従う、妻からも認められた。

大きく息を吐く。

サムライになりたかった。主君のために戦いたかった。守護霊が心をうず巻く。傍らにいる豹を見て思い出す。信長には無粋と言われた。

この働きは無粋だったのだろうか。自分はうつけなのだろうか。

目を閉じ、開き、頭から振り払う。サムライなら迷わない。昇りゆく朝日に向かう道をヤスケは歩く。